

昇を示してから急速に下降するという特徴的なパターンを示した。

この腎皮質カーブは、皮質におけるネフロンの解剖学的、生理学的情報を鋭敏に反映しているものと考えられ、腎の生理学的検討、さらには各種腎疾患における病態生理を検討する上で有用であると思われた。

## 5. 転移性骨腫瘍のシンチグラム所見とその疼痛との関係

飯沼 元	今枝 孟義	広田 敬一
曾根 康博	後藤 裕夫	関 松藏
鈴木 雅雄	柳川 繁雄	浅田 修市
山脇 義晴	松井 英介	柴山 磨樹
土井 健吾		(岐阜大・放)
古田 智彦		(同・二外)

乳癌、肺癌、前立腺癌は、骨転移が最も高頻度にみられる疾患であるので、これらの骨転移症例の骨シンチグラムと痛みの関係について検討を加えた。

対象症例は、過去3年間の骨シンチグラムのうち、乳癌148例、肺癌75例、前立腺癌55例である。

『痛みのある症例群』では、『痛みのない症例群』に比して、多発性の骨転移巣を認めることが多く、骨転移巣のRI集積度は高く、しかも5cm以上の大きいものが多い傾向を認めた。

## 6. 亜急性甲状腺炎における Prednisolone の効果に関する研究

鶴部 春松 (知多市民病院・内)

22名の亜急性甲状腺炎患者に Prednisolone 30mg/日を経口投与し、以後1週ごとに漸減、16週にわたり臨床症状、血中 RT<sub>3</sub>U, T<sub>4</sub>, T<sub>3</sub>, TSH 値、血沈値、甲状腺<sup>123</sup>I 摂取率の推移を観察し、以下の知見を得た。

1) 臨床症状および血沈値は速やかに改善され、本法は亜急性甲状腺炎に対する臨床的に有意義な治療法と考えられる。

2) 亜急性甲状腺炎では、初期に RT<sub>3</sub>U, T<sub>4</sub>, T<sub>3</sub> 値が高値、TSH 値と摂取率が低値、ついで RT<sub>3</sub>U, T<sub>4</sub>, T<sub>3</sub> 値が低下、TSH 値と摂取率が上昇、その後いずれも正常値となる経過をたどる。

3) 本法による Prednisolone 投与時の RT<sub>3</sub>U, T<sub>4</sub>, T<sub>3</sub>, TSH 値および摂取率の経時的変動は、無治療あるいは従来の治療法による場合より速やかになる。これは、Prednisolone が甲状腺に直接作用し、甲状腺の炎症性破壊を速やかに修復させることによるもので、約10週で修復が完了するものと推察される。

## 7. <sup>99m</sup>Tc-PMT による Hepatoma 転移巣の検索

### —撮像時間の検討および骨スキャン、ガリウムスキャンとの比較—

伊藤 清信	外山 宏	富田 和美
大橋 一郎	木造 大夏	江尻 和隆
竹内 昭	古賀 佑彦	(保衛大・放)
加藤 幸彦	清水 和弥	(同・放部)

Hepatoma 転移巣検索のための <sup>99m</sup>Tc-PMT 全身スキャンの撮像時間の検討および骨シンチ、ガリウムシンチとの比較検討を行った。Hepatoma 多発性転移巣のある患者に <sup>99m</sup>Tc-PMT 5 mCi 静注し経時に全身スキャンを撮像した。静注後早期は肺、肝臓への集積、以後上部、下部消化管、胆嚢への集積が background として問題になると思われた。腫瘍への集積比、腫瘍対非腫瘍の比から 20-30 分位が撮像時間に適当と思われた。<sup>99m</sup>Tc-PMT は骨シンチ、ガリウムシンチで描出されていない異常集積を認めたが、background との重なりにより描出困難な場合があり、骨シンチ、ガリウムシンチとの総合的な判断がより有用と思われた。

## 8. ガリウムスキャンにおける四肢骨(骨髄)描出例

小泉 潔	藤本 肇	内山 晓
荒木 力	日原 敏彦	西込 正人
可知 謙治	松迫 正樹	新井 誠夫
飯伏 順一		(山梨医大・放)

<sup>67</sup>Ga 全身シンチグラフィにおいて四肢骨(骨髄)描出例を分類し、各種生化学検査値と対比検討した。分類は下肢骨(骨髄)の出現パターンによって行い、脛骨も描出されるタイプ、大腿骨遠位まで、大腿骨近位まで描出されるタイプにわけ、後2者は集積程度を強、弱にわけた。全374例中59例 15.8% に何らかの下肢骨描出を見た。脛骨まで描出されるタイプは血清鉄値が高値を示す